弘前・江戸間の道中記について

佐藤良宣

Report of Memorandame about travel between Hirosaki and Edo

SATO, Yoshinobu

令和３・４年度の当館研究紀要では、当館蔵「奥州通道中記」を紹介した。

「道中記」と称する資料には、版本として流布する紀行文や、案内記とも呼ばれる旅人のための旅行案内をも含むが、弘前・江戸間の道程等が記された資料をとりあげることとする。

一　小坂道道中記（青森県立郷土館蔵　受入番号　２９６―１）

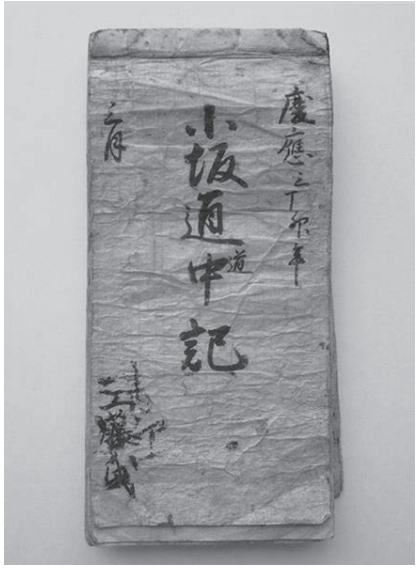

写真１　小坂道道中記　表紙

この道中記は、弘前から弘前藩上屋敷所在地である江戸本所二ツ目までの上り道中の旅程等について記したものである。表紙は次のような文言がある。

「慶應三丁戊年
　　小坂道道中記
三月　　工藤氏」

その後の文面には制作者の素性について伺える要素はみつからなかった。

小坂道というのは、いわゆる羽州街道を経由する道のことで、江戸から宇都宮を経由して福島の北、桑折で奥羽山脈を横断する山道に入り小坂峠（現 宮城県）、上ノ山（現 山形県）から現在の奥羽本線にほぼ並行する道筋で弘前に向かう。

内容は、次の各部に分かれる。

・道中川留之覚

「川留」とは、通常、増水等により、川の渡し場が通行止めになることを指すが、ここは実際に川留に遭遇した場所の一覧、あるいは、その可能性がある渡し場の一覧とも考えられる。

・登切手取所

上り旅程中での切手（通行手形）の受け渡しをする場所の一覧である。「弘前ニ而取碇関置」「久保田ニ而取、院内置」「上ノ山ニ而取、楢下置」とある。おおよそ、各領の城下町で切手の発給を受け、藩領の出口で切手を置いている様子である。これは他の道中記でも同様の記述がみられる場合もある。

・下り切手取所

前項同様、切手の授受を行う場所の一覧ではあるが、下り道中での場所を記したものである。但し、「山形ニ而取、名木沢ニ而置」「久保田ニ而取、尻合置」とのみあり、上り行程とは違い、上ノ山領についての記述がない。

・道中所々名物覚

道中各地の名物一覧である。千住は砂糖餅、古河は指足袋、白沢は鮎ノ鮨、八丁目は串柿、福島は真綿、中田は氷干餅、船沢はきび餅、森岡は潟鮒、切石鼻は鶴餅とある。本項の末尾には「●　壱里塚」とはあるが、その後の内容で一里塚の位置が表示されている様子はない。

・江戸本所二ツ目より、千住、夫より小坂通り道中記

各宿場間の里程一覧である。江戸本所二ツ目・千住間に始まり、碇ヶ関・弘前間までについて記されている。途中の小さな村々等の地点については言及されていない。駄賃の額を記すためとみられる「本　軽　夫」という表記はあるが、すべて空欄になっている。この項の末尾には「慶応三丁卯年」とある。

・道中廿日振泊附

この区間を二十日間で旅する場合の宿泊地一覧とみられる。江戸・越谷・古河・宇都宮・太田原・白川・郡山・八丁目・上戸沢・湯ノ原・山形・尾花沢・金山・院内・横手・苅和野・湊・森岡・綴子・碇ヶ関とある。

・同十七日振

十七日間で同区間を旅する場合の宿泊地とみられる。粕壁・小山・白沢・越堀・矢吹・本宮・瀬之上・関・山形・尾花沢・金山・湯沢・大曲・久保田・森岡・綴子・碇ヶ関・弘前とある。

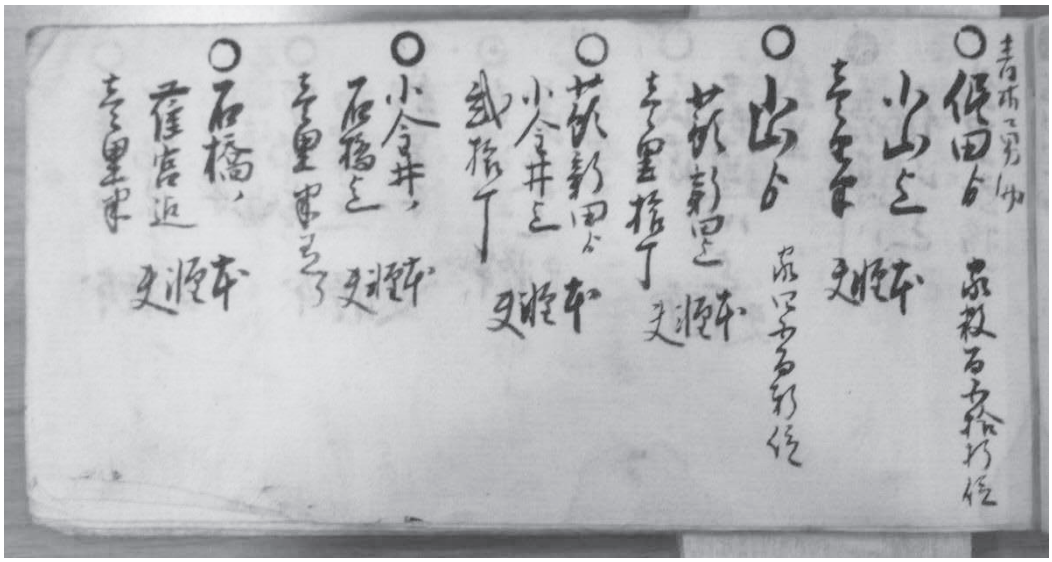

写真2　小坂道道中記「江戸本所二ツ目より、千住間、夫より小坂通り道中記」のうち、侭田・雀宮間

二　道中記（青森県立郷土館蔵　受入番号16　78のうち）

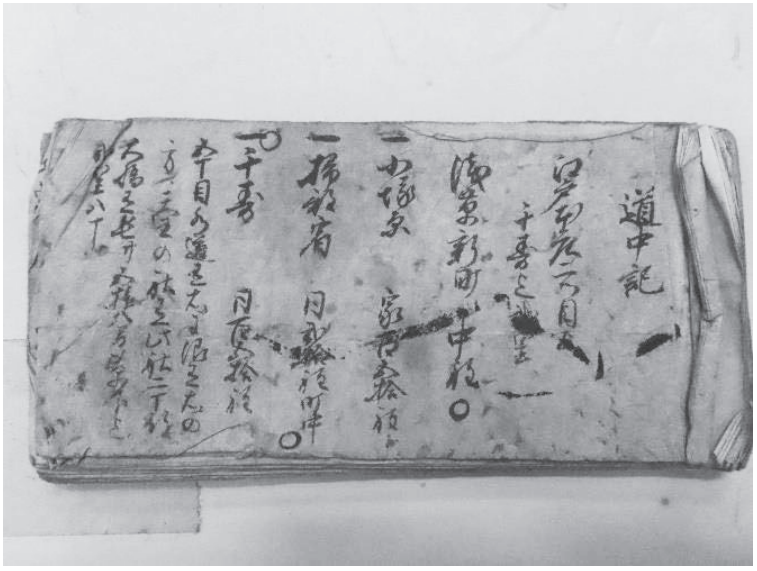

写真3　道中記　表紙

この道中記には表表紙が付けられていない。内容は、江戸本所二ツ目から弘前までの下り道中についてである。但し、前項で述べた「小坂道」を通る経路ではなく、江戸から、いわゆる奥州街道を桑折からそのまま北に進み、白石（現宮城県）から分岐する山沿いの道を川崎（現宮城県）まで行き、そこから笹谷峠を越

え、山形で羽州街道に出て、そのまま羽州街道を北上するという経路で弘前に向かう、というものである。

途中に落丁があるのか、草加から春日部付近、および、栗橋から小山の手前までの部分が欠けている。また、秋田領の釈迦内から津軽領の唐牛までの間の部分が乱丁となっており、秋田領森岡と前山の間に来ている。

記載事項は、次のとおりである。各集落の地名が一つ書きで並び、おおよそそれらの全てについて軒数が書かれている。城下町については、領主の名前が書かれている。あとは、橋や渡し場、分かれ道、城跡、寺社等のほか、主要地点までの地理情報が記されている。その他の情報についてはあまりないが、秋田領の小野村には小野小町の伝承が記されている。

弘前までの旅程を記したあと、笹谷経由での里数が百八拾四里余、小坂道の道のりが百八拾弐里余であることを記したあと、本文中では取り上げていなかった、小坂道のうち、郡（桑折）から山形までの道中についても補うように記している。

以上の文中で、各宿場での駄賃の額についての表記はないが、最後に本駄賃・軽尻・壱人分それぞれの駄賃の額が記されている。道中の総計かもしれない。

三　奥州通道中記（青森県立郷土館蔵　受入番号二四六七―一）

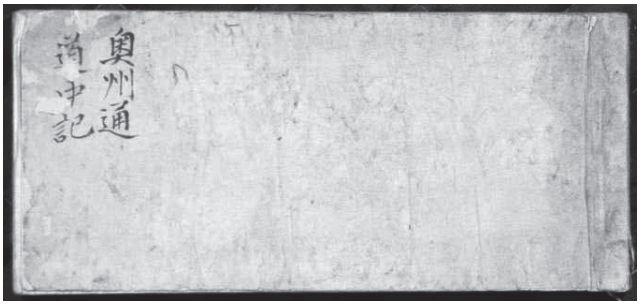

写真4　奥州通道中記　表紙

これについては、当館研究紀要第四六・四七号で全文の翻刻を紹介し、解説しているので、概略を記すにとどめる。

本資料は、弘前藩士が藩所蔵の道中記等をもとにして作成され、参勤交代の際に参考にしたものと考えられ、実用性を意識して各所の概況が簡潔に整理されている。

成立は、安政五年（一八五八）頃、実際に使用しながら新たに得た情報や知見を補足・修正したもので、末尾の万延元年（一八六〇）の年紀から、使用年代もさほど差がないと考えられる。

凡例等に続き、本文とも言える「道中記」が始まる。これは、弘前城下の本丁一丁目から、弘前藩上屋敷のある江戸本所二ツ目に至る道筋の地理的情報と、道中での慣例等について書き連ねたものである。各地の名所に関する故事についての言及が、所々にある。

「道中勤方略記」は、道中での寺社参詣や服装の注意点や宿場や関所等で出会う関係者の動きを箇条書きで記した、「道中記」を補完する内容である。次の「附録」はそれらに付随する内容である。

「定」は人馬世話役人、関所番人等への対応についての内規等である。「伺之部」は、朝の出立時の動き等、伺いを立てるべき事項を記している。

「御小姓組之頭勤方」では道中での寺社参詣、各所での土産物の購入、酒事、小休止を行う場所が列挙されている。また、立ち寄り先の部屋見取り図もある。

四　自江戸小坂通弘前迄道中記　全（弘前市立博物館蔵）

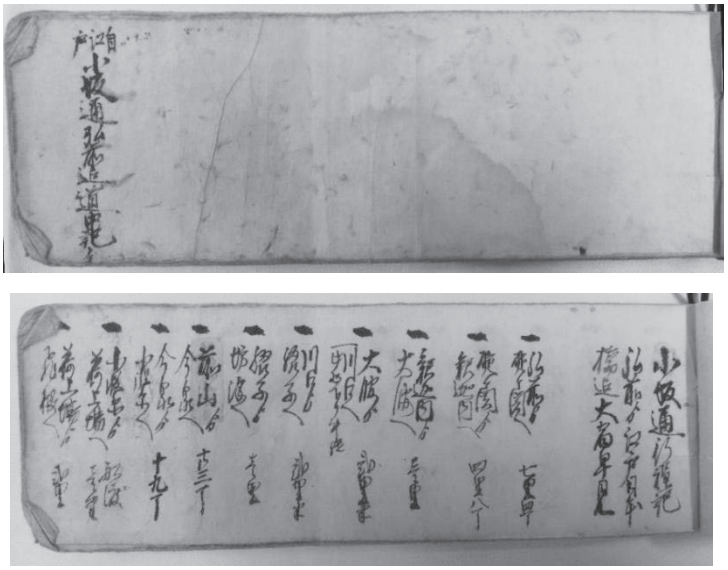

写真5・6　自江戸小坂通弘前迄道中記　全　表紙と本文

制作者は笹森正善とあるが、彼の経歴・出自等の解明は今後の課題である。この資料の内容はおよそ次の通りである。

・小坂通行程記　弘前より江戸日本橋迄大宿早見

題名のとおり、弘前・江戸間の上り行程について、主要な宿場間の里程を列挙している。これについては、次に例示するような書式で書かれている。

「一　弘前より碇ヶ関へ　七里四丁」

最後にある地名は、他の道中記とは異なり、江戸本所二ツ目ではなく日本橋である。

・小坂通道中記

前の部分とは違い、日本橋から弘前までの下り行程について扱っている。項目名の前に、次のような凡例が前置されている。

「一　江戸より弘前迄の国々の名所・旧跡・宿々・村々・御伝馬賃銭等迄有増左ニ記ス
境印　△
丁塚印　●」

本文中はこの凡例にあるとおり、宿場と途中の村・伝馬の賃銭の額等が記されているが、ほかにも、川の渡り方（瀬越・舟渡の別等）、本陣の主の名とその位置が道の左右いずれなのか、藩領の境なども記載されている。比較的簡素な記述ではあるが、六郷では鎌倉権五郎の伝説について、大きく紙幅を割いて記している。

そのあとには「江戸より弘前迄御大名城下并御高道法共左ニ」とあり、道中の主な大名と江戸から城下までの道のり一覧が掲げられている。下総国古河の土井大炊守に始まり、出羽久保田佐竹右京大夫までの名はあるが、津軽家に当たるところには「江戸ヨリ百八十四里、十万石　弘前」とのみあり、藩主の名は省略されている。

次いで、「千秋万々歳」とあるが、文は続き、最後に、「登り切手取処」「下り切手取処」が記されている。登り切手の授受が山形・松原になっているところを除けば、前述の「一　小坂道道中記」と同じである。

奥書には「文久二　壬戌年　五月吉祥日　於東都ニ　笹森正善　写之」とある。

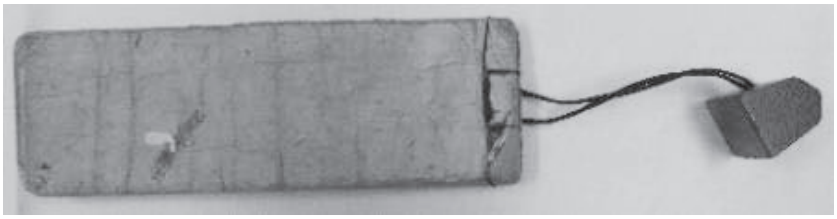

写真7　裏表紙と飾り

なお、この資料は携帯に適した小型の横帖であり、将棋の駒を分厚くしたような形の飾り物が紐で取り付けられている。

五　「道中記　参勤」（弘前市立博物館蔵）

写真8　道中記　参勤　表紙

この資料は、「参勤道中記」という名で紹介されることもあった。江戸から弘前までの道中の道のりについて記した道中記ではあるが、他の道中記とは著しく趣を異にし、道中絵図のように、絵で示したものである。これについては、三上幸子氏が『津軽デジタル風土記』で紹介しているが、これによると、写刊年次を寛政期としている。

筆者は、各地の風景については、人一倍興味を持っていたと考えられる。芦野の前には「此坂の絶頂より至極晴天にハ富士山見ゆるといふ」あるいは白川（白河）と矢吹（現　福島県）の間、四ツ屋新田のあたりでは「会津磐台（梯）山、弐（二）本松か岳も見エて眺望よし」、また、福島の手前、伏拝（ふしおがみ）坂では、「伏拝坂眺望よし、福嶌の町ミゆる」、綴子の後にも「この辺眺望よし」、剣ヶ鼻付近でも「大鰐蔵館まて見おろし絶景なり」などと、見晴らしの良い場所では、風景についての記述がみられることがある。峠道については、文の量は少なくなるものの、やや多めに紙幅を割いて絵を描いている感はある。前に紹介した「三　奥州通道中記」にも、筑波山など、ランドマーク的な山が見えるという記述は見える。しかし、そうした眺めに関する文と絵が本資料で目立つのは、筆者の興味関心が俯瞰した風景にあるためと考えることができるかもしれない。

この道中記についての凡例は示されていないが、各宿場の冒頭の項目には「左△篠崎某」などと本陣の主人の名とおぼしき人名が添えられており、それが道路の左右いずれにあるかも示している。ほか、各主要地点までの距離・城・城跡・それらの主の名前、寺社の名前、寺院ノ場合は宗派、時に名物・名所とその土地の伝説等が書かれている。集落の規模は最初の方は軒数で示されているが、後になるほど少なくなる。川があれば、橋があるかどうか、橋は土橋か仮橋か、なければ瀬越しか徒渡り、船渡しか、古戦場、等も記されている。また、集落については、旅籠屋の有無についても書かれることがある。

写真9　八軒茶屋付近

この道中記は、絵入りである強みか、図中に東西南北の方角が示されている（写真9）部分があり、その周辺については方位がわかる。あと、湧き水については記されているが、いくつか筧で水を引いている集落についての記述もみられる。追分では道の分かれ方も図示されている。

写真10　小山付近
左下で「結城道」が分かれている様子が図示されている。

小坂峠より少し先、楢下の手前の金山茶屋などでは、藩主が供の者たちに御菓子を振る舞うことが記載されている。上ノ山では最上と伊達の故事が記されている。山形は弘前・江戸の中間地点であることから、双方の地点からやってきた飛脚達がまたそれぞれ双方に向かって出発していることを記している。また、御供の者たちに手当が配られている。院内・湯沢の間の小野村では、小野小町の父親、小野吉実が住んでいたことが記されている。

文中に筆者の素性についてうかがい知れる内容はあまり見えないが、津軽領内に入ってから、剣ヶ鼻付近にある文章にその点が暗示されているかもしれない。

「剣ヶ鼻

下道ハ岩角を伝ひ、仍近道なり。冬は山の上より縄にて柴を多く移おろして、其上に雪ふり氷て後ハ馬も通る。是をしか渡と云。しかとハ氷の方言也。」

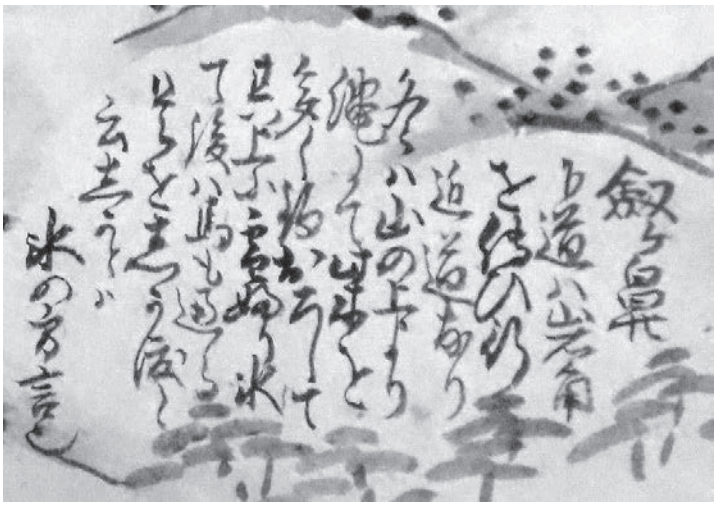

写真11　剣ヶ鼻付近「しか渡」に言及した部分

おそらく、筆者はこの「しか渡」（柴を敷いた道の上に雪を積もらせると、固く凍って馬が通れるくらいになる）というものを特筆すべきものととらえていたのだろう。また、「しか」（「シガ」か？）という方言にも少なからず興味をもっていたことも伺えるだろう。

おわりに

本項は時間的制約により、荒削りな内容となったことは否めない。今後、さらなる調査・考察により、不足を補う必要性を感じる。今まで見てきた道中記は、弘前・江戸間の参勤交代の道筋を記しており、おのずとその骨子についてはそれなりの共通性を持つ。但し、それぞれの筆者が、それぞれの道中記を書いた後に見込まれる多種多様な需要に応じ、それらに付け加えられる要素は実に様々である。往々にして、そこにはその土地土地について往年の歌人が詠んだ歌、あるいは、武家の教養として、いにしえの武人の行跡に関する伝承等も含まれている。但し、その需要が何であるかはいずれの道中記についても、筆者がそれを記していないので、後世の我々が想像するしかない。

最後に、貴重な資料について、閲覧の求めに応じていただいた弘前市立博物館の小田桐睦弥氏には感謝を申し上げる。

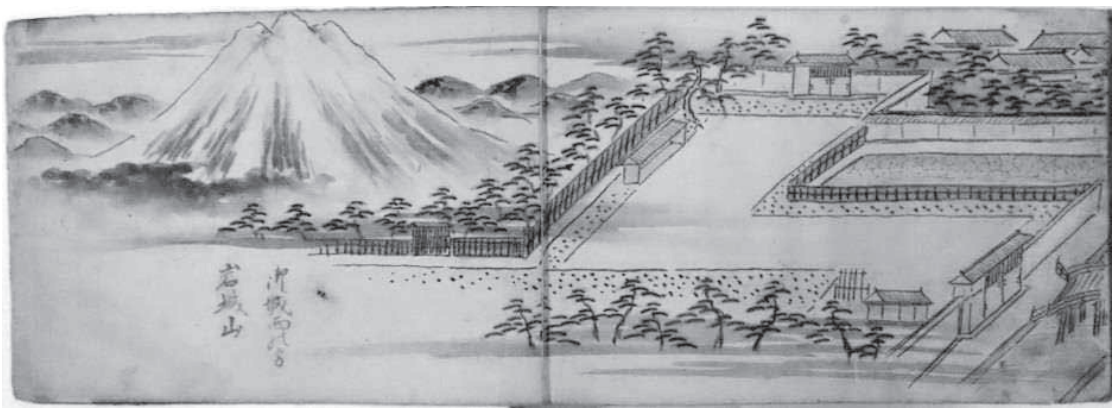

写真12　弘前城から西の方向に見える岩木山

【参考文献】
・「御登御道中記」（国文学研究資料館津軽家文書、請求番号二二B・3353・1）
・弘前大学国文学研究会編『津軽史辞典』一九七七年、名著出版

佐藤　良宣　　青森県立郷土館　学芸主幹
030－0802　青森市本町二丁目8－14